

文章産出過程に関する考察

— 束縛が書き手に及ぼす影響 —

崎 浜 秀 行

問題と目的

近年、情報メディアの発達で、文字を使った他者への情報提供の機会が増加した。そのため、こうした情報伝達の側面を重視した文章（以下、「情報伝達文」とする）を書くスキルの育成が重要であると考えられる。さらに、「情報伝達文」をただ書くだけでなく、「文章を短くする」などの制約を課して束縛を感じる状況を作り、文章を書くことが重要になる。しかしながら、学校教育をはじめ、スキル育成のための教育プログラムが実行されるには至っていない。

これまでの文章研究の多くは読み手からみたものであり、その結果を基に、書き手が習得すべき情報を明らかにした研究が多い（Burtis et al., 1983；堀田, 1991, 1995, 1996；小原, 1996；伊東, 1997；Scardamalia et al., 1984；Stalland, 1974.）。一方で、文章産出過程に制約を加え、その効果を検討するような研究については今まであまり行われていない。そこで、本研究では、「字数制限」という制約を加え、産出結果に対して及ぼす影響、及び、書き手が感じていた束縛感に関しての内省を検討する（研究1）。しかし、束縛感を感じる事柄は、書き手の内部にも見られるはずである。そこで、これらを明らかにするため、調査をもとに、文章産出時に心がけていることを検討する（研究2）。さらに、研究2から明らかになった事柄が、実際の文章産出に生かされているかについて検討を加える（研究3）。最後に、3つの研究の結果をふまえ、本研究に即した文章産出プロセスのモデルを呈示する（研究4）。

研究1

・研究1-1 実験

<目的> 情報伝達文産出の際、産出する字数が減少すると、核情報¹⁾を中心に文章をまとめる傾向が顕著になることを示すため。

<方法> 被験者は、国立N大学の学生40名であった。被験者には「モーリタニア」という国に関する資料が配布され、この国の紹介文を、200字、400字、800字、字数無制限のいずれかで書くことが求められた。実験は、実験室で個別に行われた。1セッションあたりの所要時間は1～2.5時間で、実験実施時期は1998年2月上旬～5月下旬であった。

<結果と考察> 産出文章中にある核情報を、採択された全情報数で割り、核情報採択率とした。この値を基に

1 要因分散分析を行ったところ、200字群の核情報採択率が、400字群、800字群、字数無制限群よりも有意に高いことが明らかとなった。もし、書き手が「読み手に国を伝える」ことを意識していなければ、ランダムに情報が選択されるはずである。したがって、この結果は仮説を支持するものである。

・研究1-2 調査

<目的> 「字数制限」という制約により、文章産出の際に被験者が感じたり意識したこと、および、被験者の行動を明らかにするため。

<方法> 被験者は、国立N大学の学生40名で、研究1-1の実験に参加した被験者であった。この調査は、研究1-1の文章産出終了後に行われた。

<結果と考察> 研究1-2では、「字数制限」という条件を課した時、書き手はどのようなことを感じるのかを中心に検討した。

まず、「(1)文章の自己評定」、「(2)各実験条件での文章の書きやすさ」では、群間に有意差が見られなかった。これは個人差によるものと考えられる。しかし、(2)の質問のうち、「書きにくい」という被験者の回答を分析した結果、字数が短いほど書きにくいことが明らかになった。また、被験者の内省から、情報を絞ったり、推敲をする点で、紹介したい部分や量が違うため、制限があることが書き手の負担になった、ということが示された。字数制限文、字数無制限文に関する長所、短所については、字数制限文の場合、「簡潔に書ける」、「要点が分かりやすい」などの長所がある反面、「書くことを削る場合がある」、「自由が制限される」などの短所が見られた。また、字数無制限文においては、「だらだらする」などの短所がある反面、「書きたいことを書ける」という長所が見られた。

以上の視点から、「字数制限」が書き手に束縛を与えることが示唆された。

<研究1 総合考察> 研究1-1および1-2は、「字数制限」という、書き手の外部からの制約をかけた場合の文章産出過程について検討した。研究1-2により、字数制限には①字数を縮約、②字数の拡張、の2方向が見られるが、①字数の縮約に関して検討する。この場合、「書きたいことが十分に書けない」、「書くことを削る場合がある」などの弱点は見られる。しかし、「情報選択の目安」、「要点が分かりやすい」、「簡潔に書ける」など、文章を書く上での利点も多いことが明らかとなった。さらに、研究1-1の結果より、書き手が束縛感を

1) 核情報：本研究においては、モーリタニア国を知る上で重要な情報を指す。例えば、国の位置、産業などが挙げられる。

文章産出過程に関する考察

じることにより、文章産出過程で字数縮約を求められると、核情報を中心に文章をまとめる傾向が顕著になることが明らかになった。

研究2

＜目的＞ 情報伝達文の産出に関して、書き手は普段、どんなことを意識しているのかを明らかにするため。

＜方法＞ 被験者は、大学生・専門学校生377人であった。各被験者には文章産出に関する意識を問う質問紙を配布した。質問紙は全54項目で構成され、5件法で回答を求めた。なお、項目以外に被験者が心がけていることがあると考えられるため、自由記述の欄を設けた。実施時期は、1998年6月上旬～下旬で、授業時間を利用して行われた。

＜結果と考察＞ 得られたデータのうち、回答に不備のあったもの、および分析に不適切な項目を削除し、因子分析（主因子解、プロマックス回転）を行った結果、38項目、5因子を抽出した。それぞれ、①伝わりやすさ、②読み手の興味・関心、③読みやすさ、④語句の簡潔性、⑤文章の長さ、以上の5因子である。

文章を規定する側面としては、「内容的側面」、「修辭的側面」の2側面の存在が示唆されてきた(Scardamalia, Bereiter & Steinbach, 1984)。しかし、本調査ではこれらとは異なる結果が生じた。その理由としては、(1)文章のジャンルが特定されていたこと、(2)文章産出の際に心がけることを質問した、以上2点が考えられる。

研究3

＜目的＞ 実際の文章産出の際、書き手は普段の意識を反映させるのか。また、産出文章にも普段の意識や産出活動時の意識が反映されるのか。以上2点を検討するため。

＜方法＞ 被験者は、研究2に参加した被験者のうち、専門学校生85名（平均年齢18.3歳、男性3名、女性82名）であった。文章産出に使用する資料（「オカピ」に関する資料）を配布後、30分程度でオカピの説明をする情報伝達文を産出するよう求められた。その後、質問紙への回答が求められた。この調査は1998年7月に、調査で得られた文章の評定は1998年12月に行われた。

＜結果と考察＞ まず、産出文章に関して、筆者を含め

た計2者により、研究2の5因子に対応するような評価観点を受け、採点した結果、一致率は0.80以上になった。

次に、普段の意識、文章産出時の意識、および、産出された文章、以上3者の関連をみるため、5つの下位尺度ごとに相関係数を求めた。その結果、どの下位尺度においても普段の意識－文章産出時の意識の間で有意な相関が得られた。しかし、それ以外では有意な相関が得られなかったことから、意識が必ずしも産出文章の質向上に結びつかないこと明らかになった。その理由として、①意識していることを実際に文章に産出、反映させるためのスキルが書き手に備わっていない、②本調査における条件、の2つが考えられる。

研究4

＜目的＞ 研究1－2から得られた内省より、情報伝達文産出過程を明らかにするため。

＜方法＞ 本調査における被験者は、国立N大学の学生40名であった。各被験者には質問紙が配布され、「文章はどんな書き方をしましたか」という問いに回答するよう求められた。なお、この項目は、研究1－2の調査に含まれていたものである。

＜結果と考察＞ 被験者の内省、および、調査（研究2）によって明らかになった因子をふまえ、以下のようなモデルを作成した（Fig. 1参照）。ただし、このモデルは本研究の内省から得られたデータを基にしており、今後、プロトコルを得る、などの作業が必要である。

総合考察

本研究では、文章産出過程における書き手の行動を中心に検討を加えた。その結果、「字数制限」により感じた束縛によって、核情報を中心に文章をまとめることが示唆された。また、それ以外にも内的制約があり、実際の文章産出に活用されていることが明らかになった。

しかし、本研究には様々な課題が残る。今回は外的制約として「字数制限」を課していた。しかし、その他にも制約は存在する。他の制約が課されても、書き手は束縛を感じ、そのことが産出文章に何らかの効果をもたらすのか、今後検討を加える必要がある。また、そうした制約を内在化するためにはどのような訓練が必要なのかについても今後検討する必要がある。

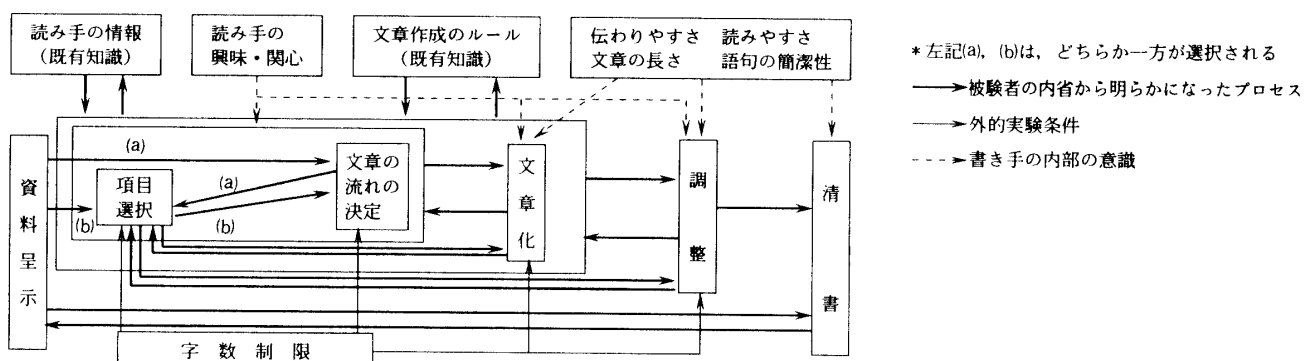


Fig. 1 本研究に即した文章産出プロセスのモデル